

Virginia 会社と「福音」

—Virginia 会社の理想と実体—

高 橋 正 平

序

1

1606年に創設され、1624年にあえなく解散した会社に Virginia 会社がある。その名の示す通りアメリカの Virginia への植民を目的とした会社である。わずか18年の短命に終わった Virginia 会社を通して我々は17世紀初頭の複雑な英国社会の一端を垣間見ることができるが、この会社は自社の宣伝と人々の Virginia への関心をおおぐために多くの説教家を雇い自社に有利な説教をして貰ったり、Virginia からあるいは Virginia 帰りの者から Virginia の実状（これも極めて楽観的なものであった）を書いて貰い、それらを次々と出版した。我々が Virginia 会社を擁護する1609年の数々の説教や会社の「宣言書」を読んで最初に抱く疑問は Virginia 会社の目的は果たしてそれらに書いてあるような宗教的使命であったのかということである。なぜかと言えば Virginia 会社は当時の Moscovy Company や East India Company 同様、アメリカ大陸での商取引のために設立されたものであり、Virginia の植民をその主たる目的としていた商業的性格の強い会社であったからである。ところがそのような会社の実体とは逆に Virginia 会社を擁護する説教や宣言書 (declaration) では Virginia 会社は商業的集団としての会社よりも異教徒の改宗といった極めて宗教的な使命を帯びた会社として描かれている。以下、本論において私は Virginia 会社は宗教的というよりは商業的性格の強い会社であったことを1609年に集中した説教、1610年の公式の宣言書等を手掛かりにして、「福音の普及」と「利益」という二点に焦点をあてて、論じていきたい。そして、なぜ会社は「福音の普及」をその主たる目的にしなければならなかったのかも合わせて論じ、最後に Virginia 会社に関する説教の中では最も代表的な John Donne の説教を取り上げ、Donne がいかにして「福音」と「利益」の問題を扱っているかをみていきたい。

Virginia 会社の目的が何であったのかについて我々が得る最初の公式の見解は1606年の James 1世の charter である。そこで James 王は「まだ神の真の知識と崇拜について暗やみと惨めな無知のなかに住んでいる人々」(such people, as yet live in darkness and miserable ignorance of the true knowledge and worship) にキリスト教を普及するさいに得る栄光のために Virginia 会社を会社組織にしたと言い、キリスト教的使命を会社設立の第一の目的としている¹⁾。これ以後の一連の説教や宣言書はすべて James 王のこの charter に沿った形で会社の性格を位地付けており、以下この点についてみていきたい。

最初に1610年の会社による公式の宣言書を見るとそこでは会社の商業的な側面は背後におかれ、もっぱらキリスト教的側面が強調されているのがわかる。

The *Principall and Maine Ends*...were first to preach, & baptize into *Christian Religion*, and by propagation of that *Gospell*, to recover out of the armes of the Divell, a number of poore and miserable soules, wrapt upp unto death, in almost *invincible ignorance*....Secondly to provide and build up for the publike *Honour*, and *safety* of our *gratious king* and his *Estates*...some small Rampier of our owne,...by transplanting the rancknesse and multitude of increase in our people....*Lastly*, the apparance and assurance of *Private commodity* to the *particular undertakers*, by recovering and possessing to them selves a fruitfull land, from whence they may furnish and provide this Kingdome, with all such necessitie, & defects under which we labour, and are now enforcd to buy, and receive at

the curtesie of other Princes, under the burthen of great customes, and heavy impositions, and at so high rates in trafique by reason of the great waste of them from whence they are now derived...²⁾

ここでは第一に原住民にキリスト教を説くことにより、彼らをキリスト教へと回宗させること、第二に、大国スペイン阻止のための城壁の建設、そして最後に個人の利殖が会社の目的としてあげられている。Virginia 会社の本来の目的からすれば最後の個人の利殖が最初に来るべきなのであるが、宗教や国内の人口問題解決に会社の目的が移されている。同様の主張はこの宣言書の数か月後に出版された宣言書にも見られる。たとえば、Virginia 植民の主なる目的は宗教を植え付けることであるとか³⁾、世界の終わりの前に福音が説かれることは明確な真理であるとか述べ⁴⁾、会社の宗教的使命に言及している。そして、最後に Virginia 植民が人々の決意と宗教によって促進されれば神は英国人の状態を強化し、Virginia に教会を築いてくれることは疑いないと言う。

Doubt ye not but God hath determined, and demonstrated...that he will raise our state and build his Church in that excellent climate, if the action [i. e. the Virginia plantation] be seconded with resolution and Religion.⁵⁾

これらの二つの宣言書は1610年に出版されたが、前年1609年に集中した説教のなかでも Virginia 会社のキリスト教的使命がまず第一に強調されているのがわかる。それらの説教の共通のテーマは新大陸における英国プロテスタンティズムの普及、反スペイン、植民地化の合法性、この世の楽園としての豊饒な Virginia といったものであるが、Robert Gray, Robert Johnson, William Crashaw, Alexander Whitaker, John Donne 等 Virginia 会社に依頼された説教家達は皆会社の Virginia 植民における宗教的使命をその第一の目的としてあげている。たとえば W. Symonds は神に召されて故国を離れた Abraham を例に出し、同じように英国を離れ、Virginia へ向かう英国人はキリストを聞いたことのない民族に福音を携えていくように神が召されるのだという。

Neither can there be any doubt, but that the Lord that called *Abraham* into another countrey, doeth also by the same hand, call

you to goe and carry the Gospell to a Nation that never heard of Christ.⁶⁾

又、Robert Gray は次のように言っている。

...whereby [i. e. by the adventures of the Virginia plantation] the glory of God may be advanced, the territories of our Kingdome enlarged, our people both preferred and employed abroad, our wants supplied at home, his Majesties customes wonderfully augmented, and the honour and renown of our Nation spread and propagated to the ends of the world.⁷⁾

Gray にあつては神の栄光の促進、王国の拡張、国民の雇用、国内の必要物の供給、国王の税の増大、英国民の名声の世界の果てまでの普及が Virginia 植民の目的である。また、R. Johnson は次のように言う。

...the high and acceptable worke, tending to advance and spread the Kingdome of God, and knowledge of his truth, among so many millions of men and women, savages and blinde....⁸⁾

Johnson はこのように Virginia 原住民への神の王国の拡大、神の知識の普及を植民の目的とみなし、更には迷える羊を救うのは英国民に神から与えられた使命であるとさえ言う⁹⁾。以上のような宗教優先、福音普及第一の態度は William Crashaw に至って更に明確にされる。Crashaw は1609年の説教で Virginia 植民を最も雄弁に、最も強硬に擁護・推進した人で、彼の説教は Virginia 会社の政策を擁護した点においては1622年の John Donne の説教に匹敵するものであるが、そこでは次のように Virginia 植民の目的が明確に述べられている。

...the principal ends of thereof [i. e. the Virginia plantation] being the plantation of a Church of English Christians there, and consequently the conversion of the heathen from the divel to God:¹⁰⁾

更には次のようにも言う。

If the planting of an *English Colonie*, in a good and fruitfull soile, and of an English Church in a heathen countrey, if the conversion of the *Heathen*, if the propagating of the *Gospell*, and inlarging of the *Kingdome*

of Jesus Christ, be not inducements strong enough to bring them into this businesse, it is pitie they be in at all.¹²¹

Crashaw は、英国植民地の建設、界教徒の改宗、福音の普及、イエス・キリストの王国の拡大が Virginia 植民参加への誘因とならなければ Virginia 植民へ参加することは遺憾なことだと言い、Virginia 植民の宗教的性格を強く訴えている。また、1612年 Robert Johnson は *The New Life of Virginia* の中で国じように界教徒の改宗こそが Virginia 植民の主なる目的であると言っている。

This is the worke that wee first intended, and have publisht to the world to be chiefe in our thoughts, to bring those infidell people from the worship of Divels to the service of God.¹²²

あるいは1615年の Ralph Hamor の次の一節を見てもわかるように彼も異教徒の悪魔崇拜を改宗させ、彼らをキリストの有する救済の知識と真の崇拜へと改心させる以上に、又、未開民族を文明生活へ導く以上に素晴らしく、貴重で輝かしい事はあるのかと問うているが、彼の意図するところは明らかである。

for what is more excellent, more precious and more glorious, then to convert a heathen Nation from worshipping the divell, to the saving knowledge, and true worship of Christ Jesus? what more praiseworthy and charitable, then to bring a savage people from barbarisme unto civilitie?¹²³

又、1620年の次の宣言書では神への真の奉仕の普及、国王の偉大さ、名誉の増大、増加する人口の解消へ Virginia 植民は貢献すると言い、キリスト教の普及を植民の第一の目的に考えている。

... this glorious worke [i.e. the Virginia plantation], tending so much to the propagating of the true service of Almighty God, to the adding of greatnesse and honour to our King, and to the benefit of our whole Nation in disburdening their multitude.¹²⁴

更に1622年5月のインディアンによる大虐殺後の緊迫した状況のなかで書かれた宣言書のなかで Edward Waterhouse は次のように言っている。

Lastly, it is to be wished, that every good

Patriot will take these things seriously into his thoughts, and consider how deeply the prosecution of this noble Enterprise concerneth the honor of his *Majestie* and the whole Nation, the propagation of Christian Religion, the enlargement, strength, and safety of his *Majesties* Dominions, the rich augmenting of his Revenues, the imploiment of his Subjects idle at home, the increase of men, Mariners and shipping, and the raising of such necessary commoditie,...¹²⁵

ここで Waterhouse は Virginia 植民が国王・全国民の名誉、キリスト教の普及、国王の領土拡張、国王の収入増大、国内の怠惰な臣民の雇用、水夫、海運の増進、必需品の栽培に係わるとしているが、やはりキリスト教普及を重視している。最後に J. Donne の説教である。この説教は Waterhouse と同じ年の1622年11月、同年5月のインディアンによる英国人大虐殺事件が英国内にも知れ渡り、激しい敵意と憎悪がインディアンに向けられる中で行われた説教であるが、Donneはその事件や会社の抱え込む問題にはほとんどふれず、徹底して福音の普及にのみ恵念せよと集まった聴衆に向かってを説く。Donne はそこで Virginia 植民者は使徒的な福音の普及という使命を抱いて Virginia へ行くのだと Virginia 会社の宗教性を強く打ち出している。これは次の引用文からも明らかである。

Beloved in him, whose kingdome and Gospell you seeke to advance, in this Plantation, our *Lord* and *Saviour* Christ Jesus, if you seeke to establish a temporall kingdome there, you are not rectified,...¹²⁶ あるいは 'Onely let your principall ende, bee the propagation of the *glorious Gospell*.¹²⁷ と述べ、福音普及を Virginia 植民に課せられた最も重要な使命であると言っている¹²⁸。

2

1606年の James 王の charter から Donne の説教に至るまで Virginia 会社の目的を調べてみたが会社本来の目的である物質的な利益への言及はできるだけ避けられ、何よりもキリスト教の普及が会社の第一の

目的として強調されていることが分かる。これは奇異な印象を我々に与える。なぜなら Virginia 会社が異境の地に「福音」を普及することを目的とした純粋に宗教的な会社ならいざしらず、それとは逆の商業的な会社であるからである。Virginia 会社に興味を抱いていた人たちが会社を宗教的というよりは商業的に考えていたことは会社や説教家達が繰り返す「利益」(profit)からも明らかである。私は福音普及は会社の表向きの目的であって、一般人の関心はもっと現実的なレベルにあったと考えたい。「福音の伝道」、「インディアンの改宗」のような宗教的使命以上に彼らが会社に期待していたのはもっと現実的な、世俗的な「利益」、「金もうけ」であった。ここに我々は Virginia 会社と一般人の間の大きなずれを感じないわけにはいかない。このような利益を求める一般人の要求を説教家達が無視したり、無知であったはずはない。Virginia 植民地への人々の参加を躊躇させているのはまさにこの「利益」なのである。たとえば、R. Cray は Virginia 植民地に反対する人々の理由は利益がないことだと言って、次のように述べている。

Their second objection, is that this age will see no profit of this plantation. Which objection admit it were true, yet it is too brutish, and bewraies their neglect and incurious respect of posteritie: we are not borne like beasts for our selves, and the time present only, but besides manie other things which may challenge an interest and right in us:¹⁹⁾

このように Gray は即座の利益を性急に求める人を批判し、Virginia 植民地は後世のためであって、現在の我々のためではないという。

We sow, we set, we plant, we build, not so much for our selves as for posteritie;... let it not grieve thee therefore to plant and build for posteritie, for the memorie of the just shall be blessed, but the name of the wicked shall rot.¹⁹⁾

更に、William Crashaw はなぜ Virginia 植民地を援助する人がいないのかの最大の原因はすぐに利益が手に入らないからだと言うが、彼も一般の人々の Virginia 植民地の関心は「福音」より「利益」にあったことを知っていた。

More particularly, wee heere see the cause why no more come in to assist this present purpose of plantation in *Virginia*, even because the greater part of men are unconverted & unsanctified men, and seeke meerely the world and them-selves, and no further. They make many excuses, and devise objections; but the fountain of all is, because they may not have present profit.²¹⁾

これに対し、Crashaw は 'profit is the least & last end aimed at in this voyage' と言い²²⁾、利益について考えることはやめて福音の普及に励むべきだと言う。なぜなら福音の普及や魂の改宗を求めれば神は必ず Virginia までの航海を利益あるものにしてくれるからである。

...if wee first and principally seeke the propagation of the *Gospell* and conversion of *soules*, God will undoubtedly make the voige very profitable to all the adventurers and their posterities even for matter of this life.²³⁾

そして、神の栄光、魂の改宗を目指せば神は必ず利益を送ってくれると言う。

...so though we do not intend our profit in this action, yet if wee intend Gods honour, and the conversion of *soules*, God will assuredly send us great profit,...²⁴⁾

Crashaw 同様 A. Whitaker も「利益」に言及しているが、彼もまた「利益」が一般人にとっていかに切実な問題であったかを十分に認識していた。彼は、神は我々の善き行いにはすぐには報いてはくれないが必ず報いはあると言い、聖書でも神は長年をかけて神の約束を果たしたのであるから今すぐ利益がないからといって神にしつこくせがむなど言う。そして「利益」は確実で、しかもそう遠くなく手に入ると言う。

let me advise you to be as liberall in adventure hither, and I dare affirme, that by Gods assistance, your profitable returns shall be of more certainty, and much shorter expectation.²⁵⁾

Whitaker は即座の利益は期待すべきでなく、それよりも神の栄光を普及すべきであるという。そして神は「利益」にたいして無関心であるのではなく、ただそ

れを延期しているだけで、最後には神の報いはあり、「利益」は必ず手に入ると言う。

God may deferre his temporall reward for a season, but be assured that in the end you shall find riches and honour in this world, and blessed immortality in the word to come.²⁶⁾

このように、一般人の会社への関心は専ら金銭的なものであり、彼らは利益の確約がないから Virginia 植民への参加を見合わせているのである。Gray, Crashaw, Whitaker 及びその他の説教家達もその点は十分に承知していたのであり、そこに我々は Virginia 会社の理想と現実を見るのである。このような一般人の会社への利益という現実的な期待感とは裏をかえせばいかに Virginia 植民が実際は商業的であったかの証拠でもあり、会社の設立当初から一般人は会社が宣伝するほどの宗教的な使命を期待していなかったことが理解できよう。キリスト教の普及は Virginia 植民の理想であり、Virginia 会社の現実を考えるとその理想は余りにも美化され過ぎているといってもよい。

我々は Virginia 会社の宣言書や会社を擁護する説教を調べることによって、会社の意図と一般人の会社への期待との間には大きな隔りがあることがわかったが、このような事実から Virginia 会社の実体が会社の言うような宗教的であったかはかなり疑わしくなってくる。この点に関して Kingsbury の次の指摘は Virginia 会社の性格を知る上で極めて重要である。

To establish a settlement which should become a market for English goods, advance the shipping, to spread the religion of the Kingdome were doubtless motives which aroused sympathy for the undertaking; but the arguments which brought investment were the opportunities for gain.²⁷⁾

更には次のようにも言っている。

The company was not only interested in the economic and industrial development and the necessary political forms of the colony, but, as Sir Edwin Sandys declared, it had a higher purpose than the Moscovy or the other commercial corporations. This high ideal is proved by the attention which is devoted to plans for the college, by the appointment of ministers, by the collections in the churches,

and by the gifts received, but the theory that the chief motive of the enterprise was religious is not supported either by the spirit or by the data of the records.²⁸⁾

Kingsbury はここで会社の宗教的性格を否定し、はっきりと利潤追及の会社として Virginia 会社を考えている。あるいは W. F. Craven の次の言葉をも参照されたい。

It has become customary to regard the work of the Virginia Company as having been primarily commercial in character, its motivation and aim essentially economic. And, to a larg extent, it was....And there is little room for doubt that foremost in the thoughts of most subscribers were the possibilites of commercial advantage through the discovery of gold, of other precious metals, or of a passge to the South Seas, and by the marketing of products...²⁹⁾

Virginia 会社の指導者やその寄付者がロンドンの実業界の人たちであったことを考え合わせると Kingsbury や Craven³⁰⁾ のこの指摘は正しいと言わねばならない。1609年、Virginia 会社が株式会社となったとき株主が何を会社に期待していたかを想像することはたやすいし、又、1619年、会社の treasurer が Sir Thomas Smythe から Sir Edwin Sandys へと代わったのも会社が期待されていたほどの利益を上げることが出来なかったからである。Virginia 会社は元はと言えば英国の海外進出、植民地政策の一環として設立された会社であるが、会社への投資の目的はあくまでも金銭的な利得であった。Virginia 会社や説教家達が繰り返す「福音の普及」は会社の本来の目的ではない。「福音の普及」といった純粋に宗教的な動機によって Virginia 会社に加わった人はいなかったと言うつもりはないが、少なくとも言えることは「福音の普及」のような宗教的な動機だけではすまされないより世俗的な動機が大勢を占めていたということである。重要なことは Virginia 会社はそれを十分に知っていたことである。しかしながら会社は単なる世俗的な、金銭的な目的をかかげ Virginia 植民を行うことはできなかった。世界各国に対して Virginia 植民を行う十分な「大義名文」が会社には必要であった。それが「福音の普及」である。当時、時代的には

聖書の影響力が低下しつつあったとはいえ、行動の規範、先例はやはり聖書であり、聖書によって認められればすべてが可能であった。だから、会社は1610年の宣言書で、また、説教家達は説教のなかで必ず最後の抛り所として聖書を引き合いに出し、Virginia 植民を正当化しようとするのである。Virginia 植民に際して聖書は相手に有無を言わせないほどの最大の説得武器となり、植民地化は「福音の普及」の名の下になんら良心の呵責を人々に与えることなく、合法的に行われるのである。このように考えてくるとなぜ Virginia 会社や説教家達があれほどまで会社の商業的な側面を二次的に考え、宗教的使命を第一に考えなければならなかったのかは容易に理解できよう。説教家の職務からして会社の宗教性を強調することは当然の事であるが、案外当の説教家達は会社の「建前」と「本音」は十分に知っていたのかも知れない。

我々はこれまで Virginia 会社の問題点として会社が果たして宗教的なのかそれとも商業的なのかを中心にして論を進めてきた。そして Virginia 会社は会社や説教家達が主張するように「福音の普及」と言った単なる宗教的な面だけではなく17世紀初頭の英国の社会、政治、経済の様々な問題をもはらんでいることを見てきた。言うなれば新大陸におけるカトリック大国・スペインとの覇権争い、国内の増大する人口問題、経済の活性化等17世紀初頭英国社会の縮図そのものが Virginia 植民には反映されているのであり、会社の公式の目的である「福音の普及」だけでは処理できない複雑な問題が背後には横たわっている。ところで Virginia 会社の宗教的使命の強調はこの時期に限られたことではない。Virginia の実情が知れ渡り、会社が下降線をたどる1622年にもう一度行われる。我々が次に見る John Donne によってである。Donne と言えば17世紀英文学を代表する詩人で、いわゆる「形而上詩人」の先駆となった人物である。彼の詩は英国の詩壇に革命をもたらすほどそれまでの伝統的な詩を打破したが、その Donne が英国国教会の首席司祭となり、1622年11月 Virginia 会社からの依頼により会社を擁護する説教を行う。Donne は若い頃から大陸を旅行したり、Cadiz, Azores 諸島へ遠征したりして microcosmos 同様 macrocosmos にも関心を寄せており、Virginia についても詩の中で言及し、また、自ら Virginia 会社の秘書になろうとしたほどで、1624年に出版された John Smith の *The Generall*

Historie of Virginia にはこの書を賞賛する詩をも書いているし、さらには Donne は自ら会社の株主であったという記録も残っている。このような事情を知ってかどうかは定かでないが、会社は Donne に説教の依頼を行う。Virginia 会社を巡る説教の中では特に有名な Donne の説教に調べることにより、我々は Donne がこれまで見てきた Virginia 会社の宣言書や説教家達と同じ主旨の説教を行っていることが理解でき、初期の会社の問題点が依然として続いていたことを改めて知るのである。

3

Virginia 会社の目的が「福音」か「利益」かの問題は更に時代が下がって1622年11月 John Donne によって論じられることになる。1622年は会社の経営を James 王が手放した1609年に次ぐ危機の年であった。この年5月、Virginia において350人程の英国人がインディアンによって殺害されるという事件が起き、このニュースが英国に伝わるや否や、激しい敵意と怒りがインディアンにむけられ、インディアン征伐の声は弥が上にも高まりつつあった⁹¹。更に会社の経営状態である。Virginia 植民を取巻く情勢が徐々に下降線を辿り、会社設立初期におけるほど Virginia 植民が人々の心を動かさなくなってきた。Virginia 植民が期待したほどの利益を上げるに至らなかったからである。とにかく、当時、最も望まれていた金、銀が Virginia では産出されず、James 王の Virginia への興味は次第に薄れ、王自身は会社はタバコ以外は何も持っていないと不満の意を表していた。このように、Virginia 会社は当初の勢いを失い初め、又、一般人の関心も薄れ、特に、Virginia に行っても経済的に元が取れるのかという問題とインディアン大虐殺事件が重く一般人にのしかかりつつあった。Virginia 会社は言わば危機存亡にあったわけで、会社としては何とかしてこのような不安を一掃し、会社がいかに安全で利益があるかを一般人に説得したかったのである。このような背景の中で St. Paul の首席司祭である Donne が行った説教は Virginia 会社という利益、金儲けをその第一の目標とした会社がいかにして神の意図と合致しうるかという内容で、これまで扱ってきた「福音」か「利益」かという言い尽くされた問題を真っ向から論じたものであった。Virginia 会社解散の2年前にお

いてもなお依然として James 王の charter やその後の会社の宣言書、説教と同じ問題を Donne が繰り返していることは興味深い。Donne のこの問題解決には17世紀初頭の英国の Virginia 植民に対する典型的な態度が窺われるので、Donne の説教における「福音」と「利益」の問題を見ていきたい。

Donne の説教における中心的なテーマは利益という会社の目的を二次的に考え、Virginia 植民者は本来は金儲けのためではなく、神の教えを広めに大西洋を越えて Virginia まで行くのだということを繰り返し強調することである。しかし、いかに Donne が神の福音を広めに Virginia へ行くのだ強調してもそれだけでは説得がない。既に言及したように最大の根拠は聖書である。聖書によって Virginia 会社の行為を正当化しなければ集まった聴衆を納得せしめるに至らない。そのために Donne は使徒行伝1.8から次のキリストの弟子たちへの言葉を文頭に掲げて説教をする。

But yee shall receive power, after that the Holy Ghost is come upon you, and yee shall be witnesses unto me both in Jerusalem, and in all Judea, and in Samaria, and unto the uttermost part of the earth.

Donne は説教をする前に必ず聖書の一部を冒頭に掲げその解釈、意義及び moral を引き出すが、Virginia 会社という特別な occasion に際しての occasional sermon ともいうべくこの説教において使徒行伝を冒頭に掲げたのは実に timely で Virginia 会社にとってはその内容が一致することになる。つまり、Donne の意図するところは使徒行伝の内容をいかにして Virginia 会社に適応するかということなのである。³²⁾ 使徒行伝と Virginia 会社との関係について Donne は説教の初めから次のように言っている。

There are reckoned in this booke [i. e. Acts], 22. *Sermons of the Apostles*: and yet booke is not called the *Preaching*, but the *Practice*, not the *Words*, but the *Acts of the Apostles*: and the *Acts of the Apostles* were to convey that name of *Christ Jesus*, and to propagate his *Gospell*, over all the world: Beloved, you are *Actors* upon the same Stage too: the uttermost part of the Earth are your *Scene*: act over the *Acts of the Apostles*; bee you a light to the *Gentiles*, that sit in darknesse:

be you content to carry him over these *Seas*, who dryed up one *Red Sea* for his first people, and hath powred out another *red Sea*, his owne bloud, for them and us.³³⁾

この文章からも明らかのように、Virginia 会社に加わる人は言わば「使徒」と同じであり彼らの第一の目的は使徒と同様キリストの教えを広めることとなる。このように Donne は「使徒」としての使命を Virginia 会社に課す一方で、「利益」という切実な問題を二次的に考える。Virginia 会社の会員は使徒たちと同様に「福音伝道」を第一に考えるべきであって「利益」は考えるべきではないと言う。キリストの弟子にとってこの世の王国ではなく、神の国がそのゴールであったと同様、Virginia 会社も Virginia においてはこの世の王国でなく、神の建設に恵念すべきであるという。Donne は次のように言う。

...let not the riches and commodities of this World, be in your contemplation in your adventures. Or, because they ask more, *Wilt thou now restore that?* not yet: If I will give you riches, and commodities of this world, yet if I doe it not at first, even if I doe it not yet, be not yet discouraged; you shall not have *that*, that is not *Gods* first intention; and though that be in *Gods* intention, to give it you hereafter, you shall not have it yet;³⁴⁾

ここで Donne は「現世の富とか利益を投機に際しては考えるな」と言うが決して「利益」を否定しているわけではない。なぜなら現世の富とか利益は神の最初の意図にはないが後で与えることは神の意図にあり、ただまだ手にしないだけであると Donne は巧みに論を進めるからである。ここで Donne は聴衆に向かって利益に奔走するよりも必ずや手に入るものに励行すべきで、それこそが最も価値のあるものだという。それは何かと言うと Holy Spirit がやってきて良心が改められ、そして「力」を得るということである。その力はキリストの証人となることを可能にする力であって、この力によって人々はロンドン、英国の各地、ローマ・カトリック教徒たちのなかで及び地の果て Virginia で、世界の至る所で神の証言をすることになるのだという。ではどうすれば Holy Spirit はやってくるのか。それは「福音」を教え広めること

によってなのである。Holy Spirit がやってくれば人々はいかなる困難、危険に際しても神の僕となり、神の教えを広めることになるのだ。だからまず「利益」はさておき、「福音」を広める担い手となれ、と Donne は説く。Donne はこのように Virginia 会社の意向に沿って説教を展開し、会社の宗教的使命を強調することを忘れはしない。しかしながら、Virginia 会社は既に触れたようにそもそもは利益を目的として設立された商業的会社であり、その株主たちも一獲千金を夢見て会社に投資したのである。そのような人たちに対して「利益」よりはむしろ福音伝道を強調することはいささか当を得ていないように思われる。Donne の「福音」強調は会社を喜ばせはするが「利益」を求める一般人にとっては不満であるからである。Donne はこの点を十分に知っており、「福音」と「利益」両者の両立を説く事によってこの問題を解決しようとする。Donne は次のように言う。現世における究極目的はキリストの証人となることであり、植民地の物質的繁栄は英国・ヨーロッパだけでなく Virginia でも「神の証人」とならなければ生じてこない。裏をかえせば「神の証人」となれば物質的繁栄は必ず来るといのである。キリストの弟子たちが現世の王国に利益を考えなかったように Virginia 会社も利益を考えるべきではない。神がゆっくりと時間をかけてイスラエル王国を地上に築き上げたように Virginia 会社も（時間はわからないが）いずれは報われる時がくる。今はキリストの教えを広めることに専念せよ、Donne はこのように説き、会社のみならず聴衆をも満足させようとする。しかしながら、聴衆の関心はやはり「利益」にあることには変わりはない。そのような人たちに対して Donne は次のように言う。

Beloved in him, whose kingdome, and Gospell you seeke to advance, in this Plantation, our Lord and Saviour Christ Jesus, if you seeke to establish a temporall kingdome there, you are not rectified,...³⁵⁾

キリストの王国を築き、キリストの福音を広めさせればいいが、現世の王国を作ろうとすればその人々の心はまだ正しくなっていない、と言って現世の王国に関心のある人たちに早く心を入れ替えるよう説得する。更に、次のように言う。

[Those] whom Liberty drawes to go, or present profit drawes to adventure, are not yet in the

right way.³⁵⁾

自由とか金儲けとかによって Virginia へ行くような人々はまだ正しい道にはないと言う訳である。ではどのような人がいいのかというと金儲けのことだけではなく、Virginia で何人のインディアンがキリスト教に改宗したかを合わせて考えている人なのである。そのような人は正しい道にあると Donne は言う。

O, if you could once bring a *Catechisme* to bee as good ware amongst them [Indians] as a bugle, as a knife as a hatchet: O if you would be as ready to hearken at the return of a *Ship*, how many *Indians* were converted to *Christ Jesus*, as what *Trees*, or *druggs*, or *Dyes* that ship had brought, then you were in the right way, and not till then.³⁷⁾

Donne は決して「利益」を禁じているのかというとそうではない。Virginia 会社の目的は利益ではなくキリスト教の布教なのだというのが、Donne は巧みに「利益」と「宗教」を両立させて認めているのである。Donne のこのような論理は次の商業活動と宗教行為がなら矛盾することはないのだと言うときに最も明確に示される。

...if thou do not *Depose* (lay aside all consideration of profit for ever, never to looke for returne) No not *sepose*, (leave out the consideration of profit for a time) (for that, and Religion may well consist together,) but if thou doe but *Post-pose* the consideration of temporall gaine, and study first the advancement of the *Gospell* of *Christ Jesus*, the *Holy Ghost* is fallen uopn you, for by that, you receive power, sayes the Text.³⁸⁾

ここではっきりと利益をただ先に伸ばして福音の伝道を最初に考えれば自ずとあとから利益がやってくると言っている。このような Donne の論理は我々がこれまでみてきたように Virginia 会社をめぐる説教には共通のもので、特に目を見張るような内容ではない。Donne の主張はいささか説得力を欠くところがあるが、Virginia 会社に招かれて説教することになった Donne にとっては福音伝道だけを説くわけにはいかず、かといって金儲けを勧めることもできず、両者の両立、しかも利益は後回しにして福音だけを最初に考

えよという説得には Donne の苦肉の策が窺われるように思われる。しかし、聴衆としてはいつ利益がやってくるのかその時期を知りたいのは当然である。この問題に対しても Donne は聖書を持ち出してくる。Donne は冒頭に掲げた使徒行伝を引用し、キリストの弟子たちがイスラエルの国を復興させるのは今なのかとイエスに問うたとき、イエスはそのときは知ることができない、ただ神だけが知っていると言った。弟子たちがそのようなしつこい質問をしたのはまだ Holy Spirit が来ていないときであって、Holy Spiritのおかげで弟子たちは現世の王国を捜すことを止めた。そのように Virginia 会社の人たちも Holy Spirit がおとずれればかれらは地上の王国ではなく神の国のみを求めることになる。そして次のように言う。

Whatsoever therefore *Christ* intended to his *Apostles* heere, hee would not give it presently, *non adhuc*, hee would not binde himselfe to a certaine time,...It belongs not to us to know *Gods* time.³⁹⁾

我々は神に神の国がいつ実現されるのかを問うことはできない。それは神のみが知ることであって我々は知ることが出来ない。しかし、かといって我々は失望することはない。神はまだ実現してくれないのであって、いずれは実現してくれるのだ。神にしつこくせがむことなく、神に時間を与えよ、そうすればいずれは報いがあるはずだ。このように Donne は説教する。これを例証するために Donne は聖書から種々な例を引いてくる。たとえばメシアの約束を神は Paradise にまいたがそれが実現するまでは 4000年 かかったとか、約束の後 2000年 たって神はようやく約束の土地を示したことを例に上げる。何百年、何千年かけて神の約束は実現されるのだから決して目先だけを考えるな、長い目で見よ、そしてたとえ失敗、困難、障害等種々な悪条件が重なって Virginia 会社が危機に接しても神は幾度も援助してくれる。丁度、ノアの大洪水が世界を洗い流してもその後、又、神は人類に暖かい目を注いでくれたように、今すぐ Virginia で成功しないからといって、利益がないからといって、インディアンによる大虐殺があったからといって決して失望するなと言う。

Bee not you discouraged, if the Promises which you have made to your selves, or to others, be not so soone discharged; though you see

not your money, though you see not your men, though a *Flood*, a *Flood of bloud* have broken in upon them, be not discouraged. Great creatures ly long in the wombe;⁴⁰⁾

そして、ただひたすら福音を広めよと言う。

Onely let your principall ende, bee the propagation of the *glorious Gospell*.⁴¹⁾

神は王国、安楽、裕福を約束はせず、神が意図するのはすぐには約束しないが、やがては努力は報われる、といささか楽観的に Donne は述べる。このように Donne は長い目でみれば Virginia 会社は必ず繁栄するであろうと繰り返して強調する。しかしながら、実際はこの説教後わずか 2年 で Virginia 会社はその存在を失ってしまうのであって、Donne の予想は必ずしも当たらなかったわけであるが、300年以上経った現在のアメリカの繁栄を見ると Donne の予想もあながち的外れであったとは言えなくなってくる。

4

これまで Donne の説教における「福音」と「利益」の扱い方を見てきたが、それは従来のとそれほど変わってはいない。特に、Crashaw や Whitaker と論調は同じである。彼らの「福音」を最初に考えれば必ず「利益」は後で手に入るという論理は Virginia 会社の宗教性と商業的性格を同時に示しており、植民を推進する上で大きな支えとなってきた論理である。特に St. Paul の首席司祭である Donne が Virginia 会社を「福音の普及」というように宗教的使命を帯びた会社として考えているのは当然と言えば当然である。しかし、Donne という当代随一の説教家が 1622年 という会社解散の 2年前の国内外の様々な問題を抱えていたときになお会社設立当時の「福音の普及」をその第一の目的と考えていたことはいかに会社が「建前」として宗教を重視していたかを如実に示している。我々は Virginia 会社の理想と実体を「福音」と「利益」の二点から論じ、会社の「福音普及」はあくまでも会社の表向きの理想であって、その背後には「利益」を求める商業的集団としての Virginia 会社が根強く存在していることをみてきた。Virginia 会社は本来の商業的性格を「福音の普及」という大義名文のもとに追いやり、Virginia 植民に乗り出した。しかし、宗教的な使命だけでは人々の関心を引きつけることがで

きず、より現実的な「利益」をもまた論じることなしには会社運営をできなかったという事実は Virginia 会社に入々が何を期待していたかを、又、Virginia 会社の実体を知る上で無視できない重要な示唆を我々に与えてくれる。Donne の説教に明確にのべられ、Donne 以前の宣言書や説教にも見られたように、会社は本来の目的を「福音の普及」の下に覆いかくし、「宗教」の名を借りて植民地政策を推進した。マックス・ウェーバー的なプロテスタンティズムの労働観がその背後にあったかどうかは断定できないが、ただ言えることは「利益」と言う問題抜きにしては語れないより世俗的な側面が Virginia 植民に関しては存在していたということである。もとより、Virginia 植民地政策の実践者がすべて Anglican であったとはいえない。我々がこれまでみてきた説教家はすべて Anglican であった。唯一の例外は W. Crashaw で、彼は Puritan であった。しかし Puritan の Crashaw が Anglican の説教家達と殆ど同様の説教をしていることは興味深い。Virginia 植民に対する Anglican と Puritan の態度、会社内での経営権争い、会社の経営権を手放したとはいえないお会社の裏で暗躍する James 王、Virginia における政治体制をめぐる Patriot party と Court party の対立等、Virginia をめぐる問題は尽きない。取り分け、Sir Thomas に取って代わった Sir Edwin Sandys と James 王の対立—Sandys は Puritan 的傾向があったと言われ、James 王は彼に対しては激しい憎悪を示していた—の中で Donne は Virginia 会社を擁護する説教を行うが、James 王の支持者たる Donne はそのような Sandys と James 王の対立を知っていたのであろうか。Virginia 会社については以上のような様々な問題が付随しているが、それらについては校を改めて論じたい。

注

- 1) Perry Miller, *Errand into the Wilderness* (New York: Harper & Row, 1964), p. 101. Millerはこの書の第4章、'Religion and Society in the Early Literature of Virginia'でVirginia 会社を商業的としてよりも宗教的に考えている。この書を私は本論が完成しつつあったときに読み、Millerのこの見解十分に本論に取り入れ

- ることはできなかった。結果としては Miller と相反する Virginia 観が本論では述べられている。
- 2) *A True and Sincere Declaration of the Purpose and Ends of the Plantation begun in Virginia...* (London, 1610), pp. 2-4.
- 3) *A True Declarartion of the Estate of the Colonie in Virginia...*(London, 1610), p. 6.
- 4) *Loc cit.*
- 5) *Ibid.*, p. 68. 又, p. 66では 'let Religion be the first aim of your hopes' と言っている。
- 6) William Symonds, *Virginia, A Sermon Preached at White Chapel* (1609; rpt. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd., 1968), p. 9.
- 7) Robert Gray, *A Good Speed to Virginia* (1609; rpt. New York: Scholar's Facsmiles & Reprints, 1937), B₂.
- 8) Robert Johnson, *Nova Britannia* (1609; rpt. Amsterdam & New Jersey: Walter J. Johnson, Inc. & Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd., 1975), B.
- 9) *Ibid.*, C₂.
- 10) William Crashaw, *A Sermon Preached in London* (London, 1610), C₃.
- 11) *Ibid.*, G₂.
- 12) Robert Johnson, *The New Life of Virginia* (1612; rpt. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd., 1971), E₃.
- 13) Ralph Hamor, *A True Discourse of the Present Estate of Virginia* (1615; rpt. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd., 1971), p. 48.
- 14) *A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in Virginia* (1620; rpt. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd., 1973), p. 11.
- 15) Edward Waterhouse, *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia* (1622; rpt. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd., 1970), p. 34.
- 16) *The Sermons of John Donne* ed. G. R.

- Potter and E. M. Simpson (Berkeley: University of California Press, 1953-62), vol. iv. p. 269.
- 17) *Ibid.*, p. 271.
- 18) 本論で取り上げた宣言書や説教以外の Virginia 会社の宗教的使命については以下を参照されたい。Richard Crakanthorpe, *A Sermon at the Solemnizing of the Happie Inauguration* (London, 1608), D₂. George Benson, *A Sermon Preached at Paules Crosse* (London, 1609), p. 92. Robert Tynley, *Two Learned Sermons* (London, 1609), p. 67. Daniel Price, *Sauls Prohibihion Staide* (London 1609), F₃. Patrick Copland, *Virginia's God be Thanked* (London, 1622), p. 35.
- 19) R. Gray, *op. cit.*, D.
- 20) *Loc. cit.*
- 21) W. Crashaw, *op. cit.*, C-C₂.
- 22) *Ibid.*, G₂.
- 23) *Ibid.*, G₃.
- 24) *Loc. cit.*
- 25) Alexander Whitaker, *Good News from Virginia* (1613; rpt. New York: Scholar's Facsmiles & Reprints, 1976), pp. 32-3.
- 26) *Ibid.*, p. 44.
- 27) S. M. Kingsbury ed., *Records of the Virginia Company of London* (Washington: Government Printing Office, 1906), vol. I, p. 24. この Introduction から教えられるところは非常に大きい。
- 28) *Ibid.*, p. 98.
- 29) W. F. Craven ed., *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613* (New York: Scholar's Facsmiles & Reprints, 1976), p. i.
- 30) Craven は *Dissolution of the Virginia Company* (1932; rpt. Massachusetts: Peter Smith, 1964) でも Virginia 会社を商業的な会社としている。この点については以下の L. B. Wright の書をも参照されたい。 *Religion and Empire* (New York: Cornell University Press), p. 57. *The Atlantic Frontier, Colonial American Civilization* (New York: Octagon Books Inc., 1965), chap. 4. *The Elizabethans' America* (Massachusetts: Harvard University Press, 1966), Introduction.
- 31) この事件を扱ったのが E. Waterhouse の *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia* (London, 1622) である。なお, Donne の説教の背景については以下を参照。Stanley Johnson, "John Donne and the Virginia Company," *ELH* XIV (1947), pp. 127-138. W. Molewyn Merchant, "Donne's Sermon to the Virginia Company" in *John Donne, Essays in Celebration* ed. A. J. Smith (London: Methuen & Co. Ltd., 1972), pp. 433-444.
- 32) この聖書適応方法は当時一般的で、先に挙げた R. Gray や W. Crashaw も使っている。
- 33) G. R. Potter and E. M. Simpson, *op. cit.*, p. 265.
- 34) *Ibid.*, p. 266.
- 35) *Ibid.*, p. 269.
- 36) *Loc. cit.*
- 37) *Loc. cit.*
- 38) *Ibid.*, pp. 273-4.
- 39) *Ibid.*, p. 270.
- 40) *Ibid.*, p. 271.
- 41) *Loc. cit.*